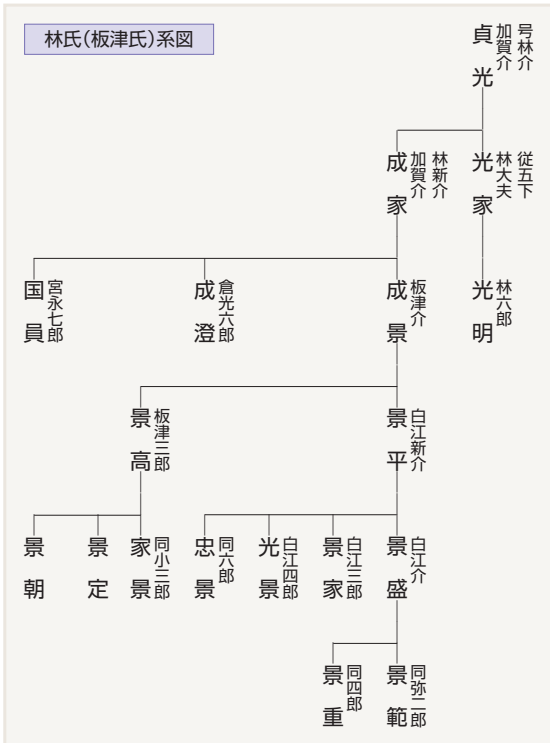


鎌倉幕府と加賀国衙こくが

寿永三年(一一八四)正月、源義仲が源頼朝の派遣した源義経と戦い、近江国粟津で敗死すると、頼朝の乳母比企尼の一族である比企朝宗が、鎌倉殿(頼朝)勸農使として、北陸道諸国に派遣された。勸農使の任務は、国衙機構を

掌握し、浪人等を旧里に帰住させる一方で、義仲与党の謀叛人跡の追跡調査を行い、その所領を没収するなどして、占領地の復興をはかることであった。同年五月、朝宗が、加賀国留守所(国府の政庁)の在庁官人(国府の役人)であつた散位大江朝臣・散位橘朝臣(実名不詳)とともに、源頼朝の命令を承けて、同国白山本宮に平家追討の目的で石川郡宮丸保を寄進したのは、その一斑である。大江氏は、平安末期に、江沼郡の惣郡司職や郷司職をおさえる在地領主で、平安末期の大治二年(一一二七)八月、白河法皇領の江沼郡額田荘の寄人のなかに、案主大江経定と番頭の大江公政がみえ、鎌倉中期の正嘉二年(一一二五)三

林氏(板津氏)系図



の命を承けて、同国白山本宮に平家追討の目的で石川郡宮丸保を寄進したのは、その一斑である。大江氏は、平安末期に、江沼郡の惣郡司職や郷司職をおさえる在地領主で、平安末期の大治二年(一一二七)八月、白河法皇領の江沼郡額田荘の寄人のなかに、案主大江経定と番頭の大江公政がみえ、鎌倉中期の正嘉二年(一一二五)三

中世小松市域周辺の荘園・公領分布図



月には、加賀国衙の書生に大江朝臣がしられた。

額田荘は、能美郡境の荘園で、現在の小松市月津地区から加賀市動橋町・庄町付近に至る、動橋川下流域の江沼平地北東隅一帯に比定できる。

また橋氏は、平安中期の承保二年（一〇七五）、橘朝臣某が、能美郡軽海郷に所在する白山中宮八院のうちの昌隆寺の寺地を寄進したと伝えられる。さ



正嘉2年3月「白山本宮住人明德丸申状」(京都市 南禅寺所蔵) 外題に、当時加賀の留守所で国務にあっていた、目代(法眼某)と書生(大江某)の免許の証判がみえる。

らに鎌倉後期の弘安元年（一二七八）、橋（埴田介）成清が、能美郡能美荘の惣公文職に補任され、永仁五年（二一九七）二月には、成清の子息成政が、

加賀国八幡宮神主職の地位と、同郡得橋郷長恒名内の荒木田・佐々木（現小松市域）などの田畠・屋敷を、鎌倉幕府から安堵されており、能美郡の国衙近辺を領主的基盤としていた。

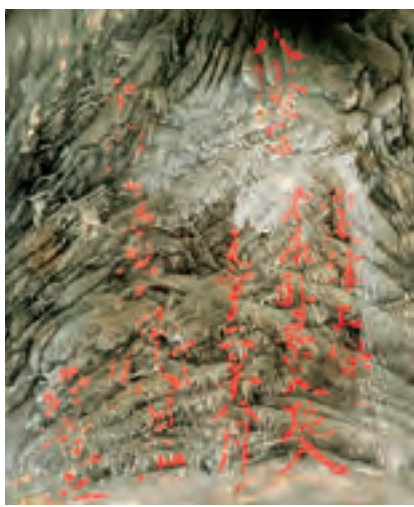
加賀の政治支配の拠点であった中世の国衙所在地は、能美丘陵西南端の梯川中流域右岸にあたる現在の小松市古府町・小野町付近と推定され、近傍には、加賀国の惣社である得橋郷内の府南社や国分寺も所在した。

文治二年（一一八六）九月、源頼朝は、額田荘領における板津介成景らの押妨と、比企朝宗の代官平太実俊による同荘領南境の侵犯、加藤次成光が地頭と号して乱行に及んだ行為を止めさせた。成景は能美郡板津荘（現能美市根上地区周辺）を本拠とした加賀の有力武士団林氏一族の御家人で、成光もその一門の可能性があり、勸農使朝宗

の代官と結んで濫妨に及んでいた。成景の家系は、その後、梯川下流域の能美郡白江保を拠点とした白江氏とともに「景」を通字としたことから、同郡粟津上保の八幡宮に奉納された、元亨二年（一三三二）八月の紀年銘を持つ木造獅子頭（国指定重要文化財）の施主としてみえる景久（姓不詳）も、成景流の林氏一族であったと思われる。

（東四柳史明）

元亨2年8月在銘の「木造獅子頭」（小松市津波倉町 津波倉神社所蔵）左写真は上顎内側に記された銘文。



元亨2年8月在銘の「木造獅子頭」（小松市津波倉町 津波倉神社所蔵）左写真は上顎内側に記された銘文。